とお笑ひになつたが、私は眞劍であつた。
でも男の方に楯つくのは普通の女性から見れば女らしくない、いやな態度かも知れなかつたが、私は貧しくして幼兒を護る母のためには、女らしさを失つても一歩もゆづることは出來なかつたのである。
暫くすると給仕さんが先刻の池本さんの書類をもつて又入つて來る
「吉田さん、坂上さんが『この住所は寺町の五番地と書いてありますが、隨分混み合つて居る處だから符合がある筈だ』と云はれましたぜ」
と云ふ。私は
「お世話樣でしたね」
と云つて、書類を持つて土地係へ訊ねに行つたが矢張符合のない處であつた。
再び戸籍係へ書類を持つて行つて見たら、池本さんは心配そうにして私を待つて居て下さつた。
「どうなさいましたか、學校の方は」
とたづねると
「許して戴きました、でもね、家主さんが隨分文句云はれましたわ」
「どうして」
「永いこと家賃持つて行つて居りませんのでねえ」
「何時から持つて行かないのですか」
「一年以上になりますわ」
「少しづゝでもお拂ひなさいね。五十錢でも、一圓でも、苦しいでせうけどね。そうすることがあなた方のためですからね」
「來月からでも何とかしたいと思ひます」
「えゝそうなさいませ。では學校の退けない前に早く行つて來なさいませ。午前中行つて、校長先生によくお願ひしてありますからね」
「有難うございました」
とさきさんは禮をのべつゝ去つて行く、池本さんは貧しいけれど、子供のことをほんとに考へて、一心になるよいお母さんだ。

○　○　○

一寸内が片づいたので大工町の川田さんを訪問したが、不在であつたので、事務所に歸つて、午前中の取扱のまとめをなしたら、三時も過ぎて居た。
「少し早目に歸る樣に」
と中田組合長の御命令があつたので、主任樣にお願して歸ることにした。
組合に歸つて見ると、今日の研究會は『都合によつて延期した』と組合長は仰言つたので、市の常務委員である關係上今日一日の取扱を報告して、組合の近くの安井さんに沐浴に行くべく支度して事務所の前に自轉車を出して居ると、
「あなたは吉田さんではありませんか、」
と見知らない男の人から聲をかけられたのでハツとして思はず其の人の顏を見ると
「私は岩倉村の中村です。家内が今産氣づきまして、直ぐ來て下さい」
といふことである。

「そうですか。伺ひます」

と云つて、直ぐ出かけて行く。山裾の石の出はつた道は氣丈せいても自轉車がころばないので、じり〳〵して來る。せき切つてかけつけて見れば、夕方の暗い納戸で産婦さんはうめいて居られる。

餘程分娩も迫つて居るが、どうしても座位でなくば分娩せぬと云ふ産婦さんにも一寸惱まされる。

四時二十五分、とても元氣な男兒が産れて、家内中大喜びであつた。

何の異常もなく後處置を終つて歸途につく。私は、何が故とも知らず西の空に向いて祈りたい、合掌したい心になつて平和な氣持で村の組合事務所へ歸りついた。

迷信との闘ひ

吉田キクヨ

赤ん坊は氣持よげに湯氣の立ちこめる盥の中で、目をパッチリ開き、手足を伸ばして私のなす儘になつてゐる。

今迄外で遊んでゐた女の兒は

「兄ちやん、やゝが湯を浴びるぞ、來て見んかア！」

といつて這入つて來るなり盥のそばへ來て座る。

里のお母さんも子達の後から覗き乍ら

「おゝ〳〵、よげなこと、こゝらの子は幸だ、毎日々々産婆さんに湯にいれて貰つて」といはれる。

「どこの人も毎日いれますよ」

と答へると

「ですけどな先生、うらが里は〇〇ですが、先度男の子が産れだけ宮詣りの日には御馳走するから來いといひますで、祝をもつて行きましたら、何と、産れた時に湯にいれたきりで、三十日もなるに一度も湯にいれず、あかゞ一杯ついてそれが胎毒となり、未だ二ヶ月たゝぬに毎日々々醫者通ひですぜ、こゝらの子はまんがえゝ」

と、語られる。

「どうして一ヶ月もお湯にいれなかつたのですか」

「さあ、それが、嫁は初産で子を扱つた經驗がなし、産婆のない所で醫者を頼んだら産ませる丈で後は沐浴にも來て貰へないし、その上姑さんは兵隊さんのお宮詣りをせにやならんけ、赤ん坊へは手は出せんといはれる」

「お宮へ詣れば何故赤ん坊に手を出されないのですか」

「汚れたら詣れません、血の汚があるといふのです」

「まア、それは困りましたな、お宮へは誰か代理が行けばよいでせうに」

「さア、それが婦人會で定めたのですから女が詣らねばいけんといふのでせうぜ、だけど先生、家の親類ばかりでない、まだありますぜそんなことが」

「どんなことですか」

「丁度同じ村で若夫婦に赤ん坊が生れたのですが、これも初めての産で樣子は知れず、困つて居たが産れるのはとても易く産れた、けれども二人共臍の緒を切ることも知らんので、若いお父さんは近所のお婆さんに頼みに行つた處が、お婆さん連中が五六人も集まつて來たが誰も手を出さず見てゐるので、赤ん坊は冷る樣になるし耐りかねて、臍の緒切つて湯にいれてやつてくれと頼むと、皆申合せた樣にこれに手を出せば汚れる、明日の兵隊さんのお宮詣りが出來ぬけ、よう手

を出さんと斷るので仕方なく、醫者を呼んで洗つて貰つたといひますぜ、どうも可笑しいことですな」といつて笑つて居られる。

赤ん坊の沐浴を終つた、着物着せて母のそばへ寢かせば、早やスヤ〳〵と眠りに入るあどけなさ、眞に神の姿そのまゝである。

私はこの話をきいて情なく思つた。

お宮詣りは日本國民としてなさねばならぬことである。而して次の日本を背負ふべく生れた赤ん坊を投出しておいて、銃後の守りと、お宮詣りに苦勞する人々の氣が知れぬ、戰地に働く人達は無論お宮詣りを喜ばれよう、けれど眞の銃後の守りとは戰地に働く人達と村のこと、家のこと、子供のことを心配かけないことだと思ふ。村人擧つて愛しい我が子を保護して貰ふことはどんなに嬉しいか知れない。寒風の荒ぶ中に露營して、結ぶ冷たい夢には、きつと我が子の丸々と肥つたあどけない笑顏が浮ぶと思ふ。その事を考へる時に後に殘つた者は託されし幼兒を健やかに護り育てる責任があるではないか。

（「醫療組合」昭和十四年八月號より轉載）

農村保健婦日記

埼玉縣入間郡某村
島　杏　子

四月×日

どうやら今日はお天氣になるかと床の中で雨垂の氣配の無いのを確かめる。

鶯が鳴いてゐる。

今日はこの村に來てからの始めての日曜日。掃除をすまし机の前に坐つて門口の櫻の蕾が大分ふくらんだと見上げてゐる所へ誰か自轉車を例に依つてどんと櫻の幹によせかけた氣配なので、伸び上つて窓下を見ると學校のY先生、こちらが覗いてゐるとも知らないで「今日は」と威勢のいゝ聲と共に窓を見上げ「やあ、之は――」とにこやかに笑ふ。赴任早々からお氣の毒だけれど受持の高一女にヂフテリーが出たので學校の消毒をお願ひしたいとのこと。快く請合つて自轉車の後姿を見送る。

早速昨日挨拶した許りの校醫の處に連絡に出掛けると發生屆は村醫の方から出て居るとのこと。ホルマリンの消毒をする程の事もないだらうからリゾールで教室を消毒する程度にして後の兒童の狀況を特別注意して觀察してゐればいゝだらうと言ふ事になる。

學校に出掛けて當直のN先生や校庭で遊んで居る子供の二、三に手傳つて貰つて教室をリゾール拭きする。南側窓の前列三人目が未だ見ぬその子供の座席。算盤や硯等が冷く机の中に轉がつて居る。初めて家庭訪問を試みようと思ふ。

出掛けに役場に寄つて發生屆を見ると、○日附の咽頭ヂフテリー、十五歲女兒、岸本千鶴、○○部落。初めてゞ家が分らぬだらうと親切に小使さんの娘をつけてくれる。青年學校に來て居ると言ふ目のはつきりした可愛いゝ娘さん。道々問はず語りに何か和やかに話してくれる。何處からか梅の香が流れてくる。そう言へばあちこちの藁屋根の軒端に白くポツトしたものが咲いて居て、その蔭に、はねつるべがゆるやかに動いてゐるのが見える。

岸本千鶴の家は山寄りの格別軒端の深い家だつた。案内の娘さんを返して「今日は」と足を踏み入れる。一寸目が馴れないと土間は格別暗い。馬鈴薯が一つとんでもない所迄轉がり出して居るのを輕くよけて、も一度「今日は」と全身を家の内に入れる。

あゝ、寢て居る、椽先からの日射の明るい所を選つて延べた床がある。薄暗い方から流し元にでも立つて居たのか髮を亂した老婆らしいのが、けゞん相な顏をし乍ら手を拭き拭き出て來る。

「學校から來たのですが千鶴ちやん如何ですか、デフテリーですつて？」と笑ひかけると「ハアーこれは」と袴の姿を見直して次第に間延びのした表情をほころばせ、「之は、學校の先生で――ハアーまあようこそ、お上りなすつて」とそは〳〵し出す。言はれる迄もなくもう袴の裾をたぐる樣にして疊代りにがまの莫蓙を敷いて床に上り込み、枕元迄歩き乍ら「今度こつちの學校に來た許りですよ、何卒よろしく、ちよい〳〵伺ひますからね。千鶴ちやんは未だ先生の顏、知らないだらう？先生も始めてだものね」と覗き込む。二枚許り重ねた布團の下が俄かにもく〳〵動いて恐ろしく汚れた布團の衿を引張り上げる樣にして、こちらの慣れ〳〵しさをどんなにして受けたものかと言つたまなざしで見上げる。十五の子供とは見られない小さな布團の寢姿。枕元にさつま芋の喰ひかけを放り出したのと盆にのつた味噌のなめかけと汚れた茶碗が轉がつて居る。「苦しい？」と一層深く覗き込んで額に手をあてると、すかさず後から「ハアー今度學校にこられた看護婦さんですか」と始めて合點がいつた樣に老婆が勢込んで覗きかゝる。笑つて眼で應へると俄かに親しさを增した樣に「千鶴、お前の言つとつた看護婦さんだとよー、早う起きて見て貰え、」と嬉しさうに急にお饒舌になつて醫者にかゝる迄の經過をしやべり出す。

床の上に起き直る子供は案外元氣そうで熱もなく今日はもう殆ど自覺症狀なき樣子。お粥を少しづゝ食べ出したと言ふ。昨日役場から見えて石炭酸で疊等拭いてくれた由、醫者には數日前出掛けてデフテリーだと言はれ注射を受けて歸つてからそのまゝ交渉なしといふ。念のため割箸で舌を抑え咽喉を覗くと殆ど目に見えた著變なし。最初は白くなつて居たと言ふ。でも醫者は迚も早く連れて來たからもうこの注射で大丈夫、中々よく氣がついたねと褒めてくれた。八年前この村に惡性のデフテリーが流行し、家からも一人出したのでその時の記憶が役に立つたのだと、誇らしそうに言ふ。

聞く丈聞いて今度はこちからそろ〳〵デフテリーの傳染性に就てそれとなく話し乍ら、結論を當分近所の人に茶を出さぬこと、病人の食器は使用後熱湯を注ぐこと、含嗽の注意、食餌の注意、血淸注射の反應症狀に就ての豫備知識、三十日許り登校禁止をさせる事への了解等に解り易く持つて行く。差し當つて問題にぶつかつてゐる丈に案外熱心に聞き、圍爐裏の傍へ案內していろんな事を質問し出す。そこへ野良着姿の老父が外から歸つて來て母親を通じての紹介に之は直ぐしつかりと挨拶し圍爐裏に上つて來て近づきとなる。

病院で手にかけた氣管切開をした喉頭デフテリーの二、三の例を話して聞かせるとその老父は「へえーそんなに息が苦しくなる迄放つておく馬鹿も居やすか」と俄かにお高く止つて無智を憐む樣な表情そのまゝきざみの煙を吐いてゐる。母親がそだを次々とくべ乍ら、盛に鐵瓶の湯加減を氣にしては、ふつと「茶は出さない方がえゝんだべ？」と苦笑して手もち無沙汰の恰好で自在鍵の工合を確かめてゐる。圍爐裏の煙の燻りの行方を見やると、かもゐ、天井が煤で一ぱい。所々黑い尾を垂れてゐるのもある。何處の家へ行つてもこの圍爐裏を何とかしなければ住居の衞生は中々問題が殘ると思ひ乍らも、この或時は元氣よくパツと燃え上り、或時はトロ〳〵と小さな舌を出してゐる焰の色には本能的な慕はしさもあり、それに照らされてゐるお百姓の顏を見てゐると、もろくもそんな氣負ひ込んだ元氣が崩折れて行くようである。それにかまど一つにしても煙突の問題は藁屋根のため之を附けるとなると相當の高さのものを具へないと巡査の檢査が喧しく傍で考へる程簡單に行かないと昨日も宿のおばさんに聞かされたものだつた。

今度來る時はリゾールを少し持つてくるから寢着の洗濯に加へるようと約束をして腰を上げる。父親がふつと見上げる樣な表情で聲を落し、「看護婦さんなら產婆さんも出來やせう」と言ふ。免狀はあるからやる氣になれば出來ない事はないが――と言へば「よろしくお賴ん申します」と言ふ。「千鶴ちやんは末つ子ちやないの？」と言へば「彼奴がその中世話になります」と裏口を顎でさす。ハツとした。何時の間にか黑い上ばりを着た柄の二十過ぎの女が暗い顏して流し元の戸口

に突立つてゐる。成程普通の體ではない。笑顔で挨拶しかけて見るがニツコリともしないで殊更に外を向いて了ふ。變だなと思ひ乍らも「産婆の方は土地にも立派なのが居るのだし、私は學校の子供と生れた後の赤ん坊の世話をするのが手一ぱいだから成可く今迄の産婆さんにかゝつて下さつた方がいゝんだけど……」と婉曲に斷り乍ら別れを告げる。

戸口迄從いて出る母親に小さな聲で「娘さん？」と聞けば「えゝ、一度嫁いだですが一寸戻つとりますんで……」とのこと。豫定日を尋ねてみると五月あたりではないかと思ふと言ふ。産婆さんは誰？と聞けば、今迄自分の時はかゝつた事はないけれど今度はかけてやらうと思つてゐるとのこと。

「おばさん、何人産んだの？」

「えゝと……」と古い思ひ出を手繰る樣にして

「四人缺がしましたから七人ですかな」

「それぢやあ大變だ、苦しい目をして何もならない、大きくなつてから缺がしたの？お産で死んだ人は居ない？」と言へば、岡星だと言はぬ許りの顏に

「二人お産で死にました。どつちもえらう難産で……何時もお父つさんがとり上げたけんど一人は足が片方出た丈で……」

思はず聞手の表情が曇るのに氣附たか終ひをボカして了ふ。

兎に角、娘さんはお産の前に是非一度産婆さんに診て貰ふようにと繰返し、近く再訪する時は娘さんにもいろ〳〵話してみたいと告げて歸途につく。

四月〇日

八時前登校。岸本千鶴の受持の先生に昨日の訪問の樣子を報告し、序でにいゝ機會だから高等科の生徒を集めてヂフテリーに就て衛生講話をする樣に時間を貰ひ打合をする。

職員室で始業前の時間を新聞に目を通してゐると、A先生が男の子を一人連れて見え、指を見てくれとのこと。見ると左の中指と藥指の可成度の進んだ瘭疽。中指など全體が恐ろしく膨滿しきつてゐる。五男、上田敏夫、〇〇部落。肘靜脈のあたりを抑えこの邊が痛いとも言ふ。衛生室に連れ行き檢溫すると三十六度八分。昨夜は痛くて殆ど眠られなかつたが今朝は餘程樂になつた樣な氣もすると言ふ。成程局所は化膿しきり今の所もう熱は持つて居ないが直ちに切開手術を要することは確か。下手をすると中指の一節位落すのではないだらうか。A先生に無論放置出來ない由を告げそれを家庭に通知すれば何とか處置出來るような家かと聞くと即座に首を振つて「この子は學校でも救護兒童です」とのこと。成程その風態はみすぼらしい。よれ〳〵になつた袷の下に夏の霜降學生服の凄く汚れたのをシャツ代りに着、裾の方はボロ〳〵に切れてゐる。A先生が最初引き渡してくれた時にも「此の子はいんきん、たむしで迚も手を燒かす子です」と冗談まじりの紹介であつた。

兎に角一應校長先生に相談して何とかしてやりたいと早速その事を告げると校長先生も二つ返事にでは直ぐ校醫の處に連れて行つてくれ、そして外科の村醫の方が專門だから校醫が手に餘ると思へばそちらに廻すだらうし、兎に角金の事など何とでもするからと理解のある態度。感謝して學校の方を暇を貰ひ子供を連れて出掛ける。

外は相變らず冷たい雨。傘を持つ手が直ぐ眞赤になつてしびれる樣だ。子供に念の爲め家を聞くと學校の直ぐ近くだと言ふので兎に角家庭訪問をして都合に依つては父親か母親を一緒に伴ひ、今後の事もあるから或程度の責任を持たせ依頼心を起させぬ樣にし度いものと子供を先に立たせる。往來から外れて山の根の方に入りやゝ勾配の急な所に建つた見るからに貧弱な小さな藁家。袴の裾が汚れるのを氣にし乍らやつと上り口らしい所に廻らうとして行くとふつと顏を覗けた母親らしい子供を負つた女が慌てゝ引込み何かごそ〳〵と片附けて居るらしい樣子。

「今日は」と傘をたゝみ雨だれをよけ乍ら暗い中を覗き込む。この家には土間と言ふものが少しもなかつた。直ぐ鼻の先に火のないゐろりとその傍に取り殘されたお櫃と茶碗が二つ三つ轉がつて居る。臺所と名の付くものなど無論なく、家の内はゐろりを切つた三疊許りの板の間と一段高くなつた八疊許りの床にがまの莫蓙を敷いて、そこに寢具を始めあらゆるものが雜然と置いてあるだけ。雨垂がビショ〳〵氣になるので私は無意識に上り口に横坐りに體をねぢ込んでから挨拶を始める。今度新らしく學校に來た看護婦であること、敏ちやんの指を今見て驚いた、何しろこのまゝ放つておくと切らなくてよい指迄切らねばならなくなるから直ぐお醫者さんに見せねばならないこと。何ちらにしても切開を要することは確かだが、「おばさん連れてつて下さる？」と一應うかゞつてみる。

出來る丈柔かに氣を使つて話しかけてるつもりなのだがそれでも初對面ではあり、あまり放置の仕方が非常識なのでつい詰る樣な調子も顏を出すのか相手は「へえ〳〵」と恐縮許りした擧句、その指は十日許り前から痛い痛いと言つて居り組合の吸ひ出し膏をつけてやつたりして居たのだとくど〳〵辯解の樣な口吻である。

兎に角今急には家の人も同伴し難い樣だつたら今日は私が醫者に連れて行くからと催促すれば、何卒よろしく願ひますと言ふ。之は豫定の行動だけれど母親の表情には今少し自覺を促してみたい樣な緩漫さがある。が、まあそれは後でもいゝ、「ちやあ、行かうよ、敏ちやん」と子供の氣分を引き立てる樣に輕く腰を上げる。母親と慣々しく世話をやく新任の先生を見較べてゐた子供は珍しく自分の存在が中心に動いてゐる事がらに何處となく緊つた表情をして戸口に出て來る。その時母親が「一寸待て、」と短く言つて脫兎の如く負子の背を向けて薄暗い方に飛んで行き、何か古い長持樣のものに首を突込んでしきるに中を掻き廻して始めた。先生と一緒に道を歩くならあんまり着物が汚いからと言つてゐる。併し中からは一向にそれらしいものは出て來ず、いら〳〵した母親の手はボロの樣なもの許り引き出してはそこへ放り出してゐる。私はふつと、はつきりした當もないのに私への見榮も手傳つての所存ではないかと怖くなり「おばさん、之で結構よ〳〵」と俄かに慌てた氣持になつて了ふ。でもその時やつと眞新しい袷のかすりの羽織が一枚引き出されてホツトする。痛い方の腕から先に袖を通させるのを見屆けて「さあ、行かう」と傘を擴げて待つ。軒端に立つた子供が容易に次の動作に移らないのでどうしたのかと思つたら「何穿いてくべえ」と母親を振り向いてゐる。母親は黙つて上り口を盛に物色し始める。成程、學校から穿いて歸つたのは可成いたんだズックの運動靴で中にぬかるみの泥が入り込み脫いだが最後一寸足が入り難い代物。

「敏ちやん、何だつていゝぢやないか、その父ちやんの低下駄でもいゝだらう」とこちらもさり氣なく先を急いだ風で連れ出さうとする。

一緒に歩き乍ら、ともすれば遲れ勝ちの子供を見やると、新らしい羽織の袖口から膨れた指を妙な工合にぶら下げて片手で傘を肩に支へて一生懸命歩いてゐる。父親の磨り減つた低下駄をひきずる樣にして、弛んだ鼻緒をぎゆつと挾むやうにし、赤くかじかんだ指を縮めては下駄の椽から上つてくる泥の感覺を無意識に逃れようとしてゐる。バスも來ないので歩いて行くことにし、道々指は一寸切るかも知れないが、そうしなければどうしても恢らないこと、從つて痛くつても少しは我慢をせねばならないことなど順々に話して聞かせると案外素直に一々頷いてゐる。

M醫師は生憎留守で刺を通じると奥さんが出て見えた。仕細を話すと兎に角暫く待つて見てくれとのこと。待合室には既に二人許りの人が待つて居る。

「濟みませんが子供の足がひどいので雜巾を」と頼んで、敷臺に腰をかけさせたまゝ、ゴシ〳〵拭いて居ると、奥さんは立つたまゝ子供の指を見て驚いた表情のまゝ「何處の子か？」といろ〳〵質ねた擧句、次第に不機嫌となり「どうしてこんなになる迄放つて置くのでせう、こゝの家の母親は數日前にも赤ん坊が病氣で藥を取りに來ました。家があまり思はしくないのでこちらでも出來る丈の事はしてるつもりです。こんなにならない中に親が當然連れてくる可きです。先生も

お出でになつた許りですのに容易ちやありませんね」とねぎらつてくれる樣子である。雜巾を濯ぎ度いがと言ふと、心持眉をしかめてもうそれは汚いから棄てゝ下さいと門口のゴミ箱を示される。勿體ないなと思ひ乍らも恐縮した樣子で言はれた通りにすると微溫湯にリゾールを落した洗面器を用意して御手を御洗ひ下さいとのこと。

M醫師は中々歸つて來なかつた。そろ〳〵晝近くなる。時折痛いか？と子供に聞くのだが痛みは一寸止つてゐるらしい。誰か又一人來た樣だ。玄關の障子を遽慮勝ちに開けて日雇姿のハツピを着た五十近い目の大きな男が待合室を覗き込み丁寧に挨拶をする。前齒が殆ど缺けて了つて「どうもお世話になりまして」と發音のはつきりしない言葉の調子だが、どうやら自分を相手にして居るらしいのでハツト敏夫の父親だと氣付く。「晝休みに仕事場から一寸歸つて來た所で」と早速に手にした風呂敷をほどいて何か新聞に包んだ溫かい感觸めものを私に押しやり「敏夫、下駄を買つて來たぞ」とほゝ齒の美事な日和下駄を玄關に揃へる。一寸受け應えに惑ひ乍らもM醫師が留守なので未だ待つてる所だと言へば、一人恐縮して「ほんとに濟みません。私も待つて挨拶すればいゝのでせうが仕事がありますので何卒御免なすつて」と無暗にお辭儀をしてあたふたと歸つて行く。

新聞紙の中には燒きたての夫婦燒が十許り思はず苦笑し乍ら「敏ちやん、食べるか」と擴げてやる。同席の田舍の人、二人にもつまんで貰ひ、敏夫がうまさうに二つ三つ食べるのを見乍ら「今朝は何杯食べて來た？」と冗談まじりに聞くと「今朝は食はなかつた」と言ふので又ハツとする。「どうしたのだ、手が痛かつたのだらう」と笑つて聞き流す樣にすれば「ウン」と又次を頬ばつてゐる。

火鉢の灰を掻き馴し乍ら何となく暗い氣持になつ行く。あの父親の態度は何かと私に賴んで居る。あたふたと歸つて行く氣持には確かに仕事の事許りではない、醫者に會ふのを何處か避けてゐる樣にもとれる節がある。「敏ちやん、赤ッ子は何處が惡かつたんだ？」

「肺炎だと――」

「藥貰ひに毎日來たか？」

「ウン」

晝を少し廻る頃になつてやつと歸つて來たM醫師は例に依つて丁寧に應待して「御苦勞樣です。私も貴女がこんな田舍に入つて下さつたのに發憤しても一度老體を鞭打つて御奉公します。ホラ、今度から學校に出掛ける日もあんなに多くしましたよ。赤い印のついてゐる日は宅での診察を止して學校に行く日です。」とにこやかにいろんな印の入つた壁のカレンダーを示す。大いに感謝して早速要件に入り子供の指を差し出すと「ホウー隨分ひどくなる迄放つておいたものですな、ホウー之を今日學校で貴女の所に持つた來た……」と盛に首をかしげ乍ら、手の甲を壓して見たりかへしてみたりしてゐる。そしてやゝあつて子供に一寸待合室で待つて居ろと部屋から出して、ちつともに視線を注ぎ、

「親の心理狀態がどうも私には分りませぬ。貴女はどうお感じで？……」

M醫師は慾得離れての律儀さがある反面に中々一こくで融通性のないことは噂丈でなく初對面から觸れるものがありはしたが、之は又思ひがけないことだつた。

「さあ……」と苦笑してやゝあつて

「あの子の家は御存知かも知れませんが、家計不如意で子供も學校で救護を受けてゐる相です。矢張り無智なのに持つて來てお金の問題であそこ迄放つたのではないでせうか……校長もお金の方のことは學校で何とかするからと申して居りますから……

でも簡單な切開ですみません樣でしたらT町にでも出して見ませうか知ら……」

それに一寸間を置く樣にして

「島さん……
あの子供の家は失禮だが私の方が詳しいです。貧乏はして居るが食ふに困る程ではありません。村内には立派な親戚もあります。先日からあの下の赤ん坊が肺炎で大分家にも通ひました。田舍の醫者は大變です。拂ふ見込もない人にでも出來る丈のことはしなければなりません。今迄あそこの家には殆ど持出していろ〳〵して來ました。
いくら無智でもあんなにひどくなつたものが自然に恢るなどゝは素人でも考へられますまい。それを私の所に連れてもこないで、學校の休みのあけるのを待つて貴女の所へ持つて行く……」
「えゝ、先生、でも私の所へ持つて來たと言ふ譯ではないんです、受持のA先生が朝禮の時に偶然見つけたのです。」
「そうかも知れません。けど、島さん、あの子の指は一寸した切開では濟みません、ひよつとすれば一節位落ちるかも知れません。手術の後の繃帶交換には、何ケ月かゝるかも分りません。それを一々貴女が私の所に連れて見えますか、學校看護婦の仕事を誤つて他に認識され出すと後で仕末がつかなくなりますて。又之はあの子一人の問題ではありません。まあ、今日は兎も角子供はあのまゝ歸しませう。親にはさう言つて下さい。M先生が迚も之は手遲れで一寸簡單には處置出來ない、學校で面倒を見るにはむつかしいからと——」
「先生、F町ならY醫院がいゝでせうか」
「Y醫院もあればB醫院もあります。併し、島さん……あなたがそこ迄お考へなさることは要りますまい。あそこの家でよく〳〵困れば又何とか私の所にでも頼みにくるでせう。切角貴女も遠い所を御苦樣でしたが何卒惡しからず。村内(むらうち)のことは之で案外簡單には行かぬものです。それに少しあそこの親達にも之を機會に反省させた方がよいかも知れませんな、ハ、ハ」と覗き込むやうにして次第に沈んで行く私をなだめる樣なまなざしである。
心の中が何かもや〳〵して滓が一ぱいにたまつて行くやうなのを抑えて素直に「失禮しました」と腰を上げる。もうこんな應待は結構だ。待合室の子供に「M先生は今日は都合が悪いそうだから一度家に歸らうね」と囁いて玄關を出る。玄關には奥さん迄、見送つて「ほんとに御苦勞樣です」と心から氣の毒そうに言ふので一層にやり場のない、いらだゝしさを感じる。子供は相變らず妙な恰好に腕を垂れてゐるが新しい下駄に明らかに元氣づいて、來る時とは違つた足どりで歩いてゐる。指は痛かないと言へば思ひ出した樣に顏をしかめて先の方がドク〳〵すると言ふ。どう考へても情なくなる。何と言つてこの子供を連れて歸つたものだらう、併し案の定手術を要するのだからほんとに村の醫者では手にあまるかも知れない。町の醫院に出した方が後のためにもよいだらう、役場で貧困證明でも貰つてやればお金の方も何とかいろがつくかも知れない、兎に角一度學校に歸つて相談しなければと學校の前迄來た所で「先生は一寸學校に寄つてくるから敏ちやん、一足先に歸つてな、母ちやんには後で行つてよく話すからな」と子供と別れる。
學校に歸つて校長先生にその事を話すと苦笑し乍ら「中々むつかしいのだからな——でもその方が却つていゝ、町に出さなきや迚も駄目だ、受持の先生に之から一足家に行つて貰つて家族の者にそのことを話させよう。金の事は困つたら又何とか役場にでも相談するだらう。どうも御苦勞樣。」と案外簡單にけりをつけて了ふ。何だか拍子拔けがするよう。確かに學校としては充分の事をしたのだ。だのに私は何となく落着かない。どころか煮え切らない氣持でせめて自分が出掛けてみ度いとも思ふのだが、受持の先生に對しても禮儀がある樣でそれも言ひ出しかね、早速に玄關を出掛けるA先生に「どこの病院に連れて行くか知れませんが貧困證明があると多少違ひますから、それとなく話してやつて下さい。そして何でも今日中に醫者に行くように少し喧しくお願ひします」と遠慮し乍ら囁いてゐる。
後刻A先生に廊下で出遇ひ「どうでした?」と質ねると「あゝ、その通り言つて置きました、先生によろしくつて感謝して居ましたよ」とのこと。
夕闇迫る頃途に着く。晝間子供と別れた道迄來るとどうも氣になつて仕方がないので一寸寄つて見ることにする。

「御免なさい」と一層に暗くなつた入口を覗くと、畳間の父親が何かギョットとした様な表情で振り向く。型許りの敏夫の寢床をとつて、その枕元で何かやつて居るのだ。「どうでした？お醫者に行きましたか」と言へば母親と二人でチラと顔見合せてから父親が向き直り苦笑し乍ら「あれから隣村のT醫師迄自轉車で連れて行きましたが生憎留守で用が足らず、もう日暮にもなつたので明日迄容子を見ることにしました。今此奴があまり痛い〳〵言ふのでちよつと搾つてやつてるところで……お蔭で少し樂になつた樣です。」敏夫の指はボロの上にそつと横たへてある。思はず驅け上る樣にして枕元にかゞみその指をみつめる。膨れた中指の紫赤色になつた突端が、ほんの少し自潰して蜂蜜の樣なネツトリした內容物が少し覗いてゐる。きつと振向いて「おちさん—醫者が居なけりや居ないでいゝんです。でもどうしてそれを私に知らせにこないの、こんな事をする樣なら何故一言私に相談してくれないの、こんなボロで拭いたりしてこれ以上黴菌でも入つたらどうする氣なのよ。」一氣にそこ迄續けて思はずその激しさに氣付きこの調子では堰が切れると、自分で自分を落着ける。畳まからのやり場のない憤懣を皆この男に男に向つて吐き出さうとするのは一寸お門違ひかも知れない。それに「教育とはものを詰め込む事ではなくて、ものをビックアップする事」だつて御自慢の言葉を忘れかゝつてゐるぢやあないか。ガミ〳〵言つてもどうならう——

兎に角それでは之から學校に連れて行て應急の繃帶と濕布をしてやるからと子供を布團から立たせる。

殆ど暗くなつた衞生室で半ば手探りに材料を引き出して、處置をほどこし「今夜痛まないように」と念じ乍ら眞白い繃帶の手を抱えて運動場の垣根の破れたところから近道に出る。夕闇の中でアルコールの濕布の香ひと、繃帶の白さが何となくこの子供を貧しさから守つてくれる樣で、それが又自分との連結點の樣な氣がし、何處となく心が暖まつてくる。併しそれもほんの瞬時で薄暗い中をひよこひよこと歸つて行くその後姿を見送つてゐると今更に何とも言へぬニガリの樣なものが心の中に大きく擴がつてくる。灯の入つた山村をボンヤリ眺め乍ら、歩き出す足どりは次第に疲れたものに變つて行つた。

昭和十五年六月廿五日　印刷
昭和十五年六月三十日　發行

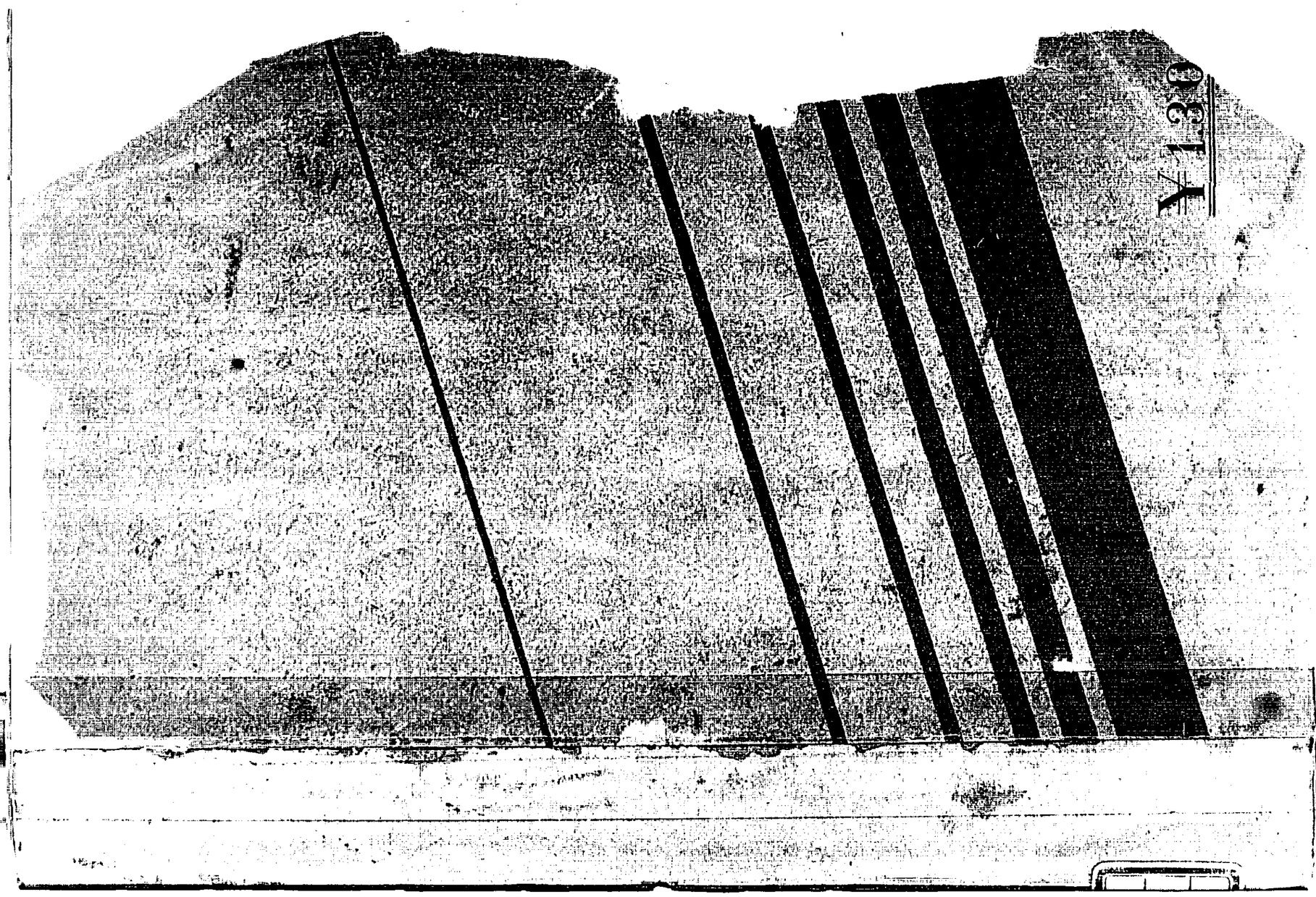
社會保健婦

定價送料共　金壹圓參拾錢

印刷者　財團法人中央社會事業協會社會事業研究所
川口芳太郎
東京市芝區西芝浦三ノ二

印刷所　川口印刷所
東京市芝區西芝浦三ノ二

發行所　財團法人中央社會事業協會社會事業研究所
東京市麴町區番ヶ關三丁目三番地
電話銀座(57)四〇一一・一七九六番


A-138